

忽那諸島界限はええとじぞなもし

平成一七年、松山市との合併を機に結成された松山離島振興協會の取り組みを紹介。「九つの島の気持ちをひとつに結ぶ」、そんな想いが、いま少しずつかたちになろうとしている。

楽しみながら取り組む

「いまの私の楽しみを取り上げないでほしい」

このセリフは、ある島の女性の言葉だ。彼女のいまの楽しみとは、朝市への出店である。その朝市は、毎月第四日曜日に開催される「道後湯あがり朝市」。全国的に有名な道後温泉の界限で、商店街に隣接した石畳の通りに沿って立つ延長二〇〇メートルの定期市だ。朝市の立つ日は「にきたつの路」と名づけられたその通りも、地元客に加え多くの観光客で賑わう。

私たち松山離島振興協会の二張りの

テントにも、常連さんがつき始めた。彼女の島のヒット商品は、「パフンウニの瓶詰め」と「モイカの一夜干し」だ。島のパフンウニは小さく、個体から微量しか取れないうえ、近年は漁獲量も減っており、いたって貴重品だが、塩にこだわり素材の味を最大限生かした一品は、酒の肴に、炊き立てのご飯にとじつに重宝だ。モイカは、アオリイカといったほうが分かりやすいかと思うが、浜風でやわらかく干し上げられたイカの甘みはまさに絶品である。干し加減は二通りあり、やわらかさを重視するか、やや水分を飛ばし旨みを凝

縮させるかだが、どちらも試してほし

い。食す時は、軽くあぶって、好みで醤油やマヨネーズ、七味などを。これは、左党から子どもまでファンが多い。これらの商品を持ちあぐねる客が、彼女の闘志に火を点けるのだろう。目が合えば、すかさず食べさせる。味で勝負、採算は二の次だ。試食を勧める彼女の笑顔に惹かれる者は多からう。彼女に限らず協会の女性たちは、皆、魅力的でたおやかだ。が、一面、男たちよりたくましく、じつはたいへんな戦力なのだ。最近では、そのことを何よりに気づかされ、家でも頭が上がりにくくなった。封建的だった島の家々もず

いふんと様変わりしており、世は女性の活躍期を迎えている。

件の「松山離島振興協会」は、松山沖の忽那諸島の活性化を目的に結成された自主活動組織である。朝市などで、こうして島の特産品を販売することを活動のひとつの柱としている。

特産品販売を島の経済活性につなげたいと考えているのだ。だから、朝市以外のイベントにも多数出展している。お陰で、近ごろは市内のいたる所で声をかけられるようになり、島の特産品販売は思わぬ成果を挙げ始めている。

が、忽那諸島を代表する特産品とは何だろうか。平成一七年一月、二市一町の合併により九島となった松山市島嶼部において、他所へこれだと誇れる特産品は未だ開発できていない。瀬戸



朝市に出展し、島の特産品をPR。

内の島だから、無論魚は美味い。海藻も豊富だ。ミカンはどこにも負けないという気持ちでつくっており、新品種の開発にも余念がない。柑橘以外の農業にも取り組み始めた。豊かな海、太陽と潮の恵みを浴びる柑橘の山々、元気野菜を育む豊穡な土地、変わらぬ勤勉な人々、いまなお残る人情。これらを上手くつなぎ合わせ、心豊かで元気あふれる生活を皆に送ってほしいと切に願う。けれども、まだ本当の意味での島の豊かさにはつながっていない。

何かを始めなければならぬ

では、協会は、何をどのようにして、島に元気を呼び込もうとしているのか。

協会の前身は、合併に伴う島嶼部の活性化のためのアイデア出しの研究会であった。研究会を仕掛けたのは松山市その呼びかけに集まった市民は島内外の男女二七人、七〇歳代から現役大学生までのバラエティに富んだ構成だ。こうしてユニークな研究会が始まった。

当時、会をまとめたのは、一年前に本誌二〇四号に、「島と市町村合併」に関する特集記事を寄稿した山野芳幸氏。地元各所の名所旧跡などをめぐり、その魅力を自らの取材と写真で綴った本『〇〇界限はええとこぞなもし』シリーズを出版するなど、地域おこしの仕掛け人でもある。山野会長のリーダーシップとやさしい人柄に導かれながら、市民メンバーが話し合った三六項目に及ぶ市への提言は、一冊の報告書にまとめられ市長へと手渡された。提言の場はセレモニーではない。プレゼンテーションの様相で班ごとの報告がなされ、市長からの感想も直接受け取ることでできた。

半年を越える研究活動は、最初は提言だけが目標だったと思う。とりあえず、市から与えられたテーマに対する意見をとりまとめれば、それでよかった。でも、それが、いつどのようにかは定かでないが、何かに気づき、皆が変わった。いや、気づかされたのかもしれない。報告会の席上、市長は数々の提言に対し熱くコメントしつつも、私たちメンバーに対し、ある種の問いかけを試み、思い切った投げかけをしていくようだった。

報告会で市長から投げられたボール。それを受け止め、投げ返す準備をとりあえず始めた。市長の示唆に呼応するかたちで、私たちが一番に取り組んだのは自らの組織化ということだった。合併という変革のなかで大き



「高齢者の集い」には島の子どもたち6人も参加した。

な危機感に煽られながらも、それらの不安を打開し、新たな一歩を踏み出すために、島嶼部全体で何かを始めなければならぬ。そんな思いが、半年間の研究活動のなかで、共通の認識として芽生えていた。個から集まりへ、集まりを広く大きく、より強固なものへとするために、新たに九つの島をつなぐ組織を結成し、島のネットワークを築く。もちろん、自信や確証などあるはずもないが、公助

を求める前に、自助、共助を試みることに、そのことへの気づき、後の継続活動へとつながり、自主自立の道を選ばせたと感じる。

市長からの問いかけは、「それは誰がやるのですか」。また、投げかけは、「あなたたちにやる気はあるのですか」。

無論、こうした直接的な言い方ではないが、意としていることは「協働」への意思確認だったと思う。そして、一八年四月に立ち上がったのが「松山離島振興協会」だ。愛称は「愛ランドまつやま」という。この名称二つを決めるのにも、多くの時間を費やした。なぜなら、それほどに思いが強い人たちの集まりだからだ。各種事業を実施するため、協会内に四つの事業部とそれを統括する事務局の機構を編成した。生活環境部は定住促進の取り組みを、地域産業部は島の特産品の開発や朝市での販売活動で島のPRを、観光振興部は桜の植樹事業を、教育振興部は児童交流事業など島での各種イベントへの協賛をまずもっての取り組みとして活動し始めた。夢工房での提言を具現化し、島に元気を呼び込むために。

こうして滑り出した協会の運営は、市のバックアップもあり順風満帆に思われるかもしれない。だが、課題や問題を抱えていないわけではない。なかでも、最も憂うべき問題は、協会の会

員数が一〇〇人程度であるということ。島嶼部全体の人口が七〇〇〇人あまりあることを考えると、協会設立の認知度の低さや、活動の周知の徹底がなされていない現状が浮かび上がる。

まずは、チラシ作成、ホームページ開設、会報発行など広報活動に力点を置いた。また、正副会長が中心となり、各島の既存組織への協力依頼や連携のお願いにも積極的に出向くなど、鋭意、協会の認知度アップに努めている。今後は、それぞれの会員が、住民に対し各種活動への理解、協力をお願いするなかで勧誘に努めるなど、協会の役割への十分な理解を得ながら、より多くの協力者を獲得していきたいと考える。そんな裏方の活動に奔走する日々のなか、ひとつの手応えを感じさせる出来事があった。

桜を植えるために人が集う

一月二三日、祝日の空はやや曇り加減だった。午後からは雨の予報だ。

今日は、松山離島振興協会の主催する桜の植樹祭である。

「日本さくらの会」が行う桜若木の配布事業に応募し、三〇〇本の桜をいただいた。加えて協会が募る桜基金が購入した若木を合わせ、一日で四三〇本あまりを植樹する。午前八時三〇分、植樹の主会場である中島本島へ島外のボランティアの皆さんも到着した。オープニングセレモニーの参加者は二〇〇人。植樹現場が遠い所では、もうすでに作業が始まっている。総勢三〇〇人以上がかかわる大イベントとなった。

植樹祭を取り仕切るのは、協会の副会長の女性だ。彼女の声かけで、多くの人が集まった。老若男女入り混じったの作業光景。二〜三メートルの若木



植樹祭に参加したボランティアの島外の人たち。

を三本の添え木で支えていく。たつぷりの水をかけまわしながら、願いを込め植えつける。一月下旬、息も白い頃であるが、皆、いきいきと働いている。作業を終えた面々を温かく迎えるのは、島の女性陣。段取り良く、手作りのうどんを皆に配る。凍えた体に熱い一杯がうれしい。皆、口々に桜の話をし、数年後の花見を楽しみにしている。「たかが桜、されども桜」か。これだけの人が動いた。彼女の一念が岩をも通したと称えたい。作業が終わるのを待っていてくれたかのように、午後からは大粒の雨が降り続いた。きつと、桜も根づくことだろう。

しかし、じつのところ、桜のお守りは大変なのだ。想像を絶する困難である。

ろう。地元の農業者や老人会などの手を借りねば、とても成功はするまい。ただ、ここに集う人たちが新たなサポーターであることは間違いない。多くの人が動いたことに、皆の島への熱い思いが感じて取れる。「島を元気に」。いつもこのことばを発する私自身が、大きな手応えを感じた。

「しまはく」へ向けて

そう、いうなれば、「松山市の九つの島の気持ちをひとつに結ぶ」という感じであろうか。私が会長を務める松山離島振興協会は、目には見えない高らかな目標を掲げ、昨年四月の立ち上げ以来、道なき道を、いや、文字通り、道のない海の上を走り続けている。とはいえ、まだまだ駆け出しのひよっ子である。認知度は低く、これといった成果も示せていない。だから、皆、おっかなびっくりで見守っているといったところであろう。

しかし、着実に進んでいることもあ

る。島の博覧会への準備だ。協会の将来的な目標のひとつに、島の博覧会「しまはく」の開催がある。これももちろん「夢工房」での提言であり、市長がメンバーに最もやる気を問うた提言でもある。近い将来、九つの島を有機的に結びつけた博覧会を催し、多くの人にお越しをいただき、島の住民自らがもてなす。それぞれの島で、島の魅力を島外のみならず

んに存分に味わってもらい、忽那諸島全体を心身のリフレッシュのためのゾーンとして形づくっていくことで、松山市のまちづくりの一端を担いたいと考えているのだ。また、それらの経済活動を住民の経済活性につなげることで、再び島に活力を呼び戻したいという思いが、「し



協会の前身「みんなのまつやま夢工房」の様子。

まはく」の提言には込められている。まずは、下準備として、しまはく準備委員会を協会内に別途立ち上げ、各島の地域資源調査に取り組みとともに、人的資源の掘り起こしにも取り組みことにした。私も、先日來、各島を回り、地域資源調査に加わっている。そして、一〇月一五日には、島めぐりのクルージングを企画、開催した。広報紙での募集に一二〇人を超

える市民の応募をいただいたが、船の定員の関係で三〇人あまりの方には残念な通知を送らざるを得なかった。

このクルージング事業は、松山市が行う「司馬遼太郎氏の小説『坂の上の雲』を軸としたまちづくり」の一環の、活動支援事業の採択を得て実施しているもの

だ。松山市では、市域を屋根のない博物館と捉える「フィードミュージアム構想」を掲げ、松山城を中心とした区域をセンターゾーン、また市内の要所をサブセンターゾーンと位置付け、各所で地域資源の掘り起こしを行っている。そのなかで、いくつかの市民団体が支援事業の採択を受けモデル調査活動を展開することで、まちの魅力づくりやまちづくり活動の一役を担っている。私たち協会も、この三カ年事業を活用し、忽那九島を三年かけて調査することで九つの魅力をしっかりと磨き上げ、と同時にひとつの魅力あるエリアとして捉え直してみたいと考えているのだ。

そんな思いのなか、初めての「島めぐりクルージング」は一〇月のどこま



「島めぐりクルージング」には多くの市民が参加した。

でも青い空と、それを映す碧く目映いばかりの海の狭間でその開催をみた。旧北条市の安居島をコースに含めた。売場で栄えた長屋門の陸月島と、映画『船を降りたら彼女の島』の舞台となった三六〇度パノラマの野忽那島も訪れた。とくに野忽那地区は、この日が秋祭りであった。大人にも子どもにも、神興の体験をしてみらおう。皆のさまざまなアイデアを試してみよう。昼食は、陸月島で「鯛めしご膳」「たこ飯ご膳」を用意した。両方食べたい向きには、島の名にあやかっただ「仲睦ご膳」を準備。女性陣も大張り切りで、おみやげ物コーナーは大盛況だ。いつもはあまりしない化粧もなかなかよい。島は花が咲いたようであった。参加の市民からは島を

褒めてもらった。関わった島の住民の笑顔も忘れがたい。「いま、島びとの気持ち少しつかみはじめたかな」。そんな感じを抱かせた一日であった。

島びとの心を動かす

忽那諸島の方向性を探る上でもうひとつ紹介したい話がある。以前、国土交通省・日本離島センター共催の『島づくりサミット2006』へ参加した。全国の名だたる島の達人がお国自慢を披露された。自慢話ではない、おらが島の経験談を話していた。「本当か」と尋ねたくなる話もあるが、その眼差しは真剣だ。リーダーの素地を感じた。また、会場の屋久島へ渡る前夜には、参加者同士の懇親の場が設けられ、翌日の長い船旅の途上では、皆、旧知の仲のようであった。元来、島びとは話し好きである。船の待合、船内、長い時間も退屈しない。些細な時間にも互いの情報を交換し合う。こうしたコミニティの存続は、島という隔絶され

た環境が幸いしたものであろう。

逆に災いしていることもある。必要以上に用心深かったり、取っ付きが悪かったりする。噂話などは信用しない性質なのだ。それはさておき、本当に屋久島での体験は心に残った。この感動が自分一人では忍びない。島に關係する皆に知らせたい、というか、直接話を聴いてほしいと思った。自身もそうだが、噂話は信用できかねるのだ。

その思いが行政に届き、三月に中島本島を会場に松山版「島サミット」が開催されることになった。住民自身が多々の先進事例を知り、その取り組みを詳細に学ぶことで、地域の振興を自らのこととして捉え、考え、取り組むことにつながるであろうとのねらいだ。市は協会とともに、協働で「島サミット」を開催する意向を示してくれている。トライアスロンの島「中島」に、鉄人ならぬ達人が集結する。全国の離島から島おこしのリーダーを招き、住民と膝を交えた議論を行うことで、新たな気づきになればと願っている。

*

協会の発足以来、このような多忙な毎日が順にめぐってきては、けたたましいスピードで後方へと駆け抜けていく。二月の二四・二五日には、県の施設「アイテムえひめ」で「第一回農林水産まつり」もあり、実行委員会の副委員長を仰せつかるなど、出番は多く体が足りない、が、楽しい。その状況にわくわくしている自分が、少しばかり

り可笑しいのではあるが……。ともあれ、ここ忽那諸島において、松山離島振興協会のメンバー、九つの島の島びと、そしてそれを支える島外の市民、そして行政との協働によって、島を元気にする取り組みが今まさに広がろうとしていることを、ここに報告したい。

これは東風か。暖かい追い風に吹かれて。

忽那諸島 data

旧中島町の忽那諸島は平成17年1月に松山市と合併。松山市の島嶼部（有人島8島）の人口は5,540人（平成17年国勢調査）。トライアスロンの島として知られている中島や、かつて伊予餅の行商が盛んだった陸月島、シーサイド留学に取り組んでいる野忽那島など島それぞれの個性が光る。



田中政利 (たなか まさとし)

昭和21年、旧温泉郡中島町生まれの60歳。同42年、派米農業実習生として米国へ。同48年から、温州ミカンや伊予柑の栽培など柑橘農業のかたわらゴカイ養殖を本格的に始め、養殖業組合の組合長を務める。平成17年1月の市町合併により松山市民となったが、現在も合併建設計画の中島地域審議会会長を務めている。松山離島振興協会会長。愛媛県松山市上怒和(怒和島)在住。